HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	湯浅, 万紀子; 福田, 美波
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 31
Issue Date	2015-06-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59420
Type	book
File Information	MuseumNews_31_web.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 1345-059X
北海道大学 総合博物館

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MuseumNews

北海道大学総合博物館ニュース

ISSUE 31
June 2015
2015年6月発行



CONTENTS

01 館長就任挨拶

02 総合博物館公開ボランティア講座・館長講演会
北方民族の世界：常設展開設に向けて

05 新規常設展示「CAMUIロケット」

06 実物科学教育の札幌圏モデルの構築
～ CISEネットワーク総括～

07 ボランティア活動紹介

10 卒論ポスター発表会

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

館長就任挨拶



私は津曲敏郎先生の後任として、この4月より北海道大学総合博物館館長を拝命しました。今後の2年間の重責に、身が引き締まる思いであります。

当博物館は1999年の開館以来、300万点を超える貴重な学術標本・資料を有する全国でも有数の規模を誇るようになりました。また、歴代の館長をはじめとする専任スタッフの方々、本学学生・院生、そして多くのボランティアの皆様のご努力によるユニークで様々な博物館活動も高く評価されるようになってきました。そして2014年7月には、入館者数が100万人を超えるなど、当館は大学博物館として順調に歩んできたと言えるでしょう。その中で昨年度から開始された博物館棟の改修工事は今年度から最終段階を迎え、2015年4月に博物館は休館となり、2016年7月頃にリニューアルオープンする予定であります。それまでの1年余りの期間は、これまでの16年間の歩みを振り返り、今後の博物館のあり方を考える上で、我々にとって非常に重要な時期であると考えます。

北海道大学総合博物館は、「モノ」「コト」そして「ヒト」の3つのキーワードの出会いの場を創ることを目指して活動してきました。つまり博物館の基本的使命である北海道大学が有する貴重な学術標本・資料を整理・保管し（モノ）、そこに含まれた情報（コト＝事）を提供することで、「モノ」は歴史や未来を語ってくれます（コト＝言）。それだけではなく当館では、全人教育を担う「ミュージアムマイスター」の育成や、標本・資料の準専門家としての「パラタクソノミスト養成講座」、そして標本整理や展示解説などへの多くのボランティアの参画など、学生や教職員だけではなく市民（ヒト）にも開かれた博物館を目指してきました。この理念は今後も、当館活動の根幹をなすものとして変わることはありません。

しかし大学は変わりつつあります。2004年に始まった大学法人化以降、各大学が個性的な教育・研究理念を掲げ、独自の経営戦略を持つことが求められています。つまり国立大学の多様化と機能分化、そして個性が本当に試される時代になってきたと言えるでしょう。もちろん大学、あるいは社会がどのように変化したとしても、学術標本・資料の収集・保管、そして次世代への継承という博物館の基本的な使命は変わることはありません。しかしこのような社会の変化の中で大学博物館のあり方も変化すべきであると考えます。

このような状況を鑑み、当館ではリニューアルにあたり、北大ブランド発信のさらなる強化を目指します。まず全学部・研究機構の教育・研究成果を紹介するブースをこれまで以上に充実させる計画です。また北大で推進している、産学官連携の教育・研究成果の紹介にも力を注ぎます。北大は、1年を通じて多くの市民や国内外からの観光客が訪れる魅力あるキャンパスを持っています。そのほぼ中央に位置する当館で、これらの北大の魅力・成果を社会に発信できることは、他の大学にはない強みであると考えています。一方で、当館はこれまで地域社会との連携を目指してきました。リニューアルでは、多目的スペースや講演ホールの整備を図り、博物館ボランティア活動や社会学習をこれまで以上に充実させることを目指します。

これらの計画を実現するためには、多額の予算確保や人員拡充など困難な課題が山積しています。そのためには、大学当局と博物館が一体となり、北海道大学の魅力を発信する拠点として整備していくことが肝要と考えております。リニューアルオープンを迎え、北海道大学博物館の第2ステージが始まる今後の2年間、微力ではありますが、その大役を全うしていく所存でありますので、皆様のご指導・ご協力のほどよろしくお願い致します。


カリムスキー火山（中部カムチャッカ）を背景に

中川光弘
（館長・大学院理学研究院教授／岩石学・火山学）

総合博物館公開ボランティア講座・館長講演会

北方民族の世界：常設展開設に向けて

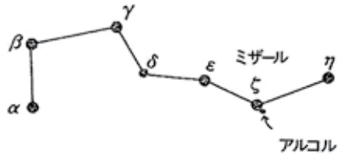
●2015年2月14日


龍を描いたナーナイの刺繍

館長退任を前に、ボランティアの皆さんへお話しさせていただく機会を得ましたが、当館が4月から長期休館に入ることから、リニューアル後に開設を計画している常設展の一つについて広くご紹介しておきたいという気持ちもあって、公開講演会の形をとらせていただきました。同時に私自身、北大を定年退職するにあたり、これまでの研究の中で出会った北方民族の世界を振り返る機会とさせてもらいました。

◉北方民族との出会い：星をめぐって

私にとって最初の北方民族との出会いは、サハリン（樺太）から引き揚げてきたウイルタのお婆さんでした。80年代はじめ、まだ海外での調査がむずかしい頃、道内でツングース諸語の話者に接することができたのは、駆け出しの言語学者にとって幸せなことでした。いろいろな単語を教わっている中で、「北斗七星」のことをナダサということを聞きました。ナダは7のことですから（日本語ナナと似ていますがその関係は明らかではありません）、多分星の数から来ているのだろうと思って確かめると、「貧乏人には7つしか見えんが、金持ちには8つ見えるんだと」という意外な答え。そのときはその意味がよくわからないまま、ノートに書きとめておきました。北斗七星の柄から2番目の星が典型的な二重星（見かけ上2つの星が重なって見える星）で、古来視力の指標となってきたということを知ったのはもっと後になってのことでした。狩猟民には目が命です。視力こそが獲物の多寡を決め、ひいては貧乏人と金持ちの分かれ目となる、という意味がわかったときには、お婆さんはもう星の世界の人となっていました。以上のエピソードについては、津曲編著『北のことばフィールド・ノート』（北大図書刊行会、2003年）にも書きました。



北斗七星の二重星

80年代後半に至って、ようやく中国東北部やロシア極東のツングース諸語を外国人研究者が実地調査できるようになりました。アムール川流域のナーナイの村々を訪ねた際に、持ち歩いたのが『デルス・ウザーラ』の本でした。黒澤明監督による映画化（1975）で有名ですが、20世紀初頭に沿海州を探検したアルセーニエフの同名の著述がもとになっています。探検の現地案内人として活躍したのが、ゴリド（ナーナイの旧称）を自称するデルス・ウザーラという実在の人物です。私にとって、言わば第二の北方民族との出会いと言えます。この作品の中でも、狩猟民として生きてきたデルスが視力の衰えを悟り、森を去らねばならなくなった経緯が描かれています。『デルス』からは、当時のツングース系の人々の暮らしぶりや考え方を学ぶとともに、そのアイデンティティや記述の信憑性などを検証することにもなりました。その際にも「星」を表わす単語や、彗星の目撃がキーとなったのには、不思議なつながりを感じます。これについては上記の本でも触れたほか、当館の土曜市民セミナーでもお話ししたことがあります（2006年1月14日）。

フィールドワークができるようになってからは、いろいろな北方民族との出会いがありましたが、私にとって大きな転機となり、今でもお付き合いが続いているのがウデヘの元教



カンチュガ氏（右）と筆者（2007年）



カンチュガ氏のお話をもとに作った絵本

師アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・カンチュガさん（1934－）です。96年、ロシア沿海州のビキン川流域の村でお会いして以来、もう20年近く毎年かよっています。ウデヘ語は他のほとんどのツングース諸語と同様、民族自身が文字で書く習慣がなく、話し手の数ももはや百人に満たない、まさに消滅の危機に瀕した言語ですが、このカンチュガさんはみずからウデヘ語をロシア文字で書き表わすことができ、膨大な量の自伝テキストをロシア語との対訳で提供してくれています。私のほうでそれを本の形にまとめて、著者や村に還元するとともに、一部は訳書としても刊行しています。アレクサンドロヴィチというロシア式の父称から、お父さんの名前もアレクサンドルだったことがわかりますが、このロシア名は実は1927年、探検途上のアルセーニエフの道案内をしたときに、彼から名付けてもらったということが、自伝の中で父から聞いた話として書かれています（カンチュガ著／津曲訳『増補改訳ビキン川のほとりで』北大出版会、2014：17－18, 330－332）。それまで作品の中の世界でしかなかったデルスとアルセーニエフが眼前の人物につながっている、と知ったときは感激しました。少年時代の自伝からは、当時のウデヘの暮らしぶりを知ることができます。1947年の「シホテアリン隕石」の目撃談や、翌48年の日食に際して人々がどんな行動をとったか、など天体現象に関する記述も、少数民族側からの具体的な証言として貴重です（同上：85－86）。

◉祈り、伝える：信仰と伝承

北方民族の精神生活や民話の世界、さらに古代から現代へと受け継がれるアートな世界を覗いてみると、北方ならではの独自性とともに、どこかしら懐かしさや親しみをおぼえるような面もあります。たとえば、アムール川流域のナーナイからサハリンのウイルタ、さらに隣接する非ツングース系民族ニヴフなどのあいだには、「フニ」（ニヴフ語では別の呼び名も）と呼ばれる、一種の病気に関する俗信があります。よその家に行って出された料理に手を付けなかったり、あるいは客人からお土産をもらえなかったりすると（とくに子どもが）腹痛などを起こすというものです。治すには、もらえなかったものをもらって来るか、それに代わる小さな木偶を作ったりします。おもしろいことに、日本のモノモライという目の病気も、もともとはよそから物をもらうと治るという俗信による命名だそうです。

20世紀初頭、サハリンでアイヌ語を蝋管に録音したピウスツキ（北大がその再生に寄与し、当館にも展示があります）は、ウイルタやニヴフの民族・言語調査も行っています。彼のノートにもこのフニに関する記録があるのみならず、彼が採集したウイルタの民話にもこれに類する描写が含まれています。ネズミの母親とカエルの母親が一緒に木の実を採りに出かけますが、ネズミだけが木に登って実を独り占めし、カエルは手ぶらで帰ります。母親たちが帰って来て、ネズミの子どもたちは木の実のお土産に大喜び、一方、カエルの子どもたちは「フニで」目がつぶれた、とあります。このお話でもう一つおもしろいのは、木の上で実を独占して一つもやらないというのが「猿蟹合戦」のシーンを思わせるところです。「猿蟹」の後半の復讐譚によく似た話も、これとは別の民話としてナーナイやニヴフのあいだに知られています。そこでは、ドングリ、魚の顎骨、下痢便、焼き串、それに大槌といった、人間でも動物でもないキャラクターがそれぞれの特性を生かして相手をこらしめるというところが「猿蟹」そっくりです。ほかにも、たとえばウイルタには、鳥にさらわれて離れ小島に連れて来られたキツネが、アザラシの背中を渡って帰る、という「因幡の白兎」によく似た話があったりします。

◉北方民族展示に向けて

リニューアル後の展示では、北方民族の伝統的な衣食住や精神生活、移動手段などとならんで、こうした民話やその基盤である言語もさまざまな手法で紹介したいと思っています。その中で、北大ゆかりの研究者がとくに北方言語研究において大きな役割を果たしてきたこともアピールしたいと思います。さらに彩り豊かな刺繍や切り絵、北方ならではの素材（魚皮、樹皮、毛皮など）を活かした、現代につながるアートな世界もご覧いただきます。しかしながら、私自身を含め研究者個人のコレクションや当館所蔵資料だけでは常設展を構成するのは困難です。そこで当館では道立北方民族博物館（網走市）との協力協定を結ぶこととしました（2015年3月に締結）。これにより、資料や情報の提供を受けるのみならず、当館からも協定館をはじめ道内の関連施設へと導くサテライト的な役割を果たせるのではないかと考えています。リニューアル後の展示にぜひご期待ください。

津曲敏郎
（資料部研究員・文学研究科特任教授／北方民族言語学）



ナーナイの樹皮製容器

平成26年度
研究報告会

●2015年3月23日



津曲敏郎館長からの開会の挨拶

平成26年度の研究報告会が2015年3月23日に「知の交流」コーナーで開かれました。津曲敏郎館長の挨拶の後、研究部長の大原昌宏から博物館の1年間の行事を振り返る報告、CISEネットワークの事務局をされている菊田融さんよりCISEネットの活動報告がありました。

CISEネットワークは、札幌周辺の博物館、科学館、図書館、動物園、水族館などの社会教育施設がネットワークを組み、お互いに恊働をしながら活動を連携させていく組織です。平成24年から3年間、科学技術振興機構（JST）の「科学技術コミュニケーション推進事業・ネットワーク形成地域型」の助成金を受け活動していました。CISEの役割の説明では、北大総合博物館が地域博物館の中心的役割をはたし貢献していることがアピールされました。

その後、チェンバロ（林昌広さん）、図書（久末進一さん）のボランティア報告がありました。林さんは、ボランティアではありませんが、チェンバロの湿度温度管理やコンサート会場の事前準備を常にサポートしていましたので、その視点からチェンバロボランティアの活動の歴史、評価、問題点を要領よくまとめられました。ボランティアメンバー以外からの発表という点でもユニークな発表でした。久末さんは、植物標本に使用された古新聞の整理結果を発表されました。本来は使用後捨てられる新聞紙ですが、未整理標本に付随する形で数十年にわたり計らずも保存されていた「思いがけない貴重資料」となりました。明治大正昭和初期の満州新聞や欧米の折り込み広告など、今では手に入らない貴重な新聞資料が残されていました。歴史ある総合博物館収蔵資料の新たな一面が紹介されました。

その後、資料部の在田一則、小笠原正明、高井宗宏の3名の先生より研究報告がありました。発表内容はプログラムをご覧ください。

恒例の研究報告会ですが、博物館のアクティビティがもっとも良くわかる機会です。今回は約30名の博物館関係者の方の出席があり、それぞれグループ別や個人的に行われている活動や研究内容が相互に理解され、より一層の親睦を深める会となりました。

◉研究報告会プログラム次第（進行：大原）

1. 開会の挨拶
津曲敏郎　館長　13:30－13:35

2. 研究部報告
大原昌宏　研究部長　13:35－13:45

3. CISE報告
菊田融　CISE事務局　13:45－13:55

【ボランティア報告】

4. チェンバロボランティア
林　昌広　13:55－14:10

5. 図書ボランティア
久末進一　14:10－14:25

【資料部研究員報告】

6. 山脈の上昇　日高山脈とヒマラヤの例から
在田一則　14:35－14:50

7. 教養教育における博物館活動と連動した『インテグレート・サイエンス』の授業
小笠原正明　14:50－15:05

8. 第二農場について
高井宗宏　15:05－15:20

9. 閉会

大原昌宏
（研究部教授／昆虫学）

道立北方民族博物館と相互協力協定締結

2015年3月24日、網走市の道立北方民族博物館にて調印式が行われ、北方民族博物館の岡田淳子館長と当館の津曲敏郎館長が協定書にサインをしました。

この協定は、北方民族文化の普及・啓発に関わる展示・講演、学術研究上の交流、情報交換及び資料の閲覧・貸借などを相互協力事項とし、相互の発展に向けて、連携を深めることを目的としています。北方民族博物館の協力体制のもと、リニューアルオープン時には、北方民族に関する資料の常設展示を計画しています。



津曲敏郎館長と岡田淳子館長

当別町産セイウチ科骨格化石の寄託契約締結

2015年3月30日、宮司正毅町長、白井応隆教育委員長をはじめとする当別町関係者と、当館の津曲敏郎館長、小林快次准教授が出席し、当別町役場にて寄託契約締結式が執り行われました。

1977年当別町当別川流域で発見され、国立科学博物館の調査研究により新種であることが明らかになったセイウチ化石の保存・管理が、総合博物館に寄託されました。セイウチの進化を解明する上で大変貴重なこの化石は、将来的には総合博物館での一般公開を予定しています。



津曲敏郎館長と宮司正毅町長（写真提供：当別町）

新規常設展示

「CAMUIロケット」

CAMUIロケットを開発している
永田晴紀教授（右）と植松努専務



完成した展示コーナー



2015年1月より、総合博物館2階「産学連携」コーナーにて「CAMUI（カムイ：Cascaded Multistage Impinging-jet）型ハイブリッドロケット」展示が公開されました。この展示は総合博物館監修のもと、文学研究科開講の展示プロセス演習（担当教員：佐々木亨教授）の学生が中心となり、制作されました。

CAMUIロケットとは、大学院工学研究院 永田晴紀教授と株式会社 植松電機らによって研究・開発されている、小型のハイブリッドロケットです。このロケットには、火薬や爆発物等の危険物が使用されていません。燃料にはプラスチック（ポリエチレン）、酸化剤には液体酸素が使用されています。両方とも私たちの身近に存在する物質であり、危険物には該当しません。そのため、一般的なロケットが使用するような安全管理設備とそれらに掛かる費用を省略することが可能です。費用面のハードルが下がることで、利用できる人の幅を広げることができます。将来、ごく一般的な実験装置として、CAMUIロケットが多くの人々に活用されることなどが期待されています。

展示では、CAMUIロケットについての解説パネルのほか、CAMUIロケットの実機を4機展示しています。その内1機は機体内部の構造が見られるようになっています。さらに実際に使用された燃料や、CAMUIロケットの歴代モデルを含めたロケットのペーパークラフトからは、CAMUIロケット開発の歴史を感じ取ることができます。また、「失敗」もCAMUIロケット開発の大事な要素です。植松電機の植松努専務による「失敗を恐れるのではなく、失敗から何を学び、どう工夫するのかが重要である」というメッセージを込め、爆発で粉々になった機体の残骸を展示しています。展示室奥では永田教授と植松専務のインタビュー映像を流しています。文字だけでは伝えきれない、ロケット開発に対する熱い思いやメッセージを、ぜひ実際にお聞きください。

総合博物館の耐震改修工事のため、現在展示をご覧いただくことができません。リニューアルオープンを迎えた際には、ぜひCAMUIロケットの展示コーナーまで足をお運びください。

丹野佑香
（制作当時：文学研究科修士2年、
現在：帯広百年記念館 史料収集嘱託員）

冬季企画展示「美術の北大」

「美術の北大」展のこれまでとこれから

●2014年10月4日～ 11月30日

北海道大学文学研究科芸術学研究室では、2011年度より本学が所蔵している300点を超える美術作品の悉皆調査、すなわちすべての作品を一点ずつ現認する作業を実施し、現在までのところその約半数を終えました。今後も調査を継続して実施する予定です。

今回の展覧会はその成果の一端として、本学ゆかりの作家が制作した49点の絵画作品を展示しました。調査の過程で、中央画壇や北海道画壇で名を知られた作家はもとより、無名でありながら優れた作品を描いている作家を発見することもできました。そのような作品、作家を一つずつ、一人ずつ調査研究することには多くの困難を伴いますが、院生を中心にその成果を展覧会という形で実現し、図録を編集してそこに解説文や論文を執筆することは、芸術学や博物館学、ひいては人文科学の教育研究にとって大いに意義あることと考えられます。併せて講演会、市民セミナー、シンポジウムなどを通し、調査研究成果を広く市民に還元することは大学の社会的責務に他なりません。

また現状、作品の保存保管の点でさまざまな問題のあることも判明しました。例えば、建物の改修、増築などに伴い作品の所在が不明になってしまうこと、展示されないまま倉庫や備品庫などに押し込められている作品が少なからずあること、展示されていても、日光や照明、温湿度などの点で十分な配慮が払われていないこと、などです。

本展のアンケートでは、第2回目の開催や作品の常設展示の希望が多く寄せられました。本展は本学所蔵の美術資産の活用法を検討する道を開きましたが、今後、常設展示のギャラリー開設を含め、作品の望ましい管理に向け、関係各位にご協力をお願いする次第です。

北村清彦
（文学研究科芸術学講座教授／美学・芸術解釈学）



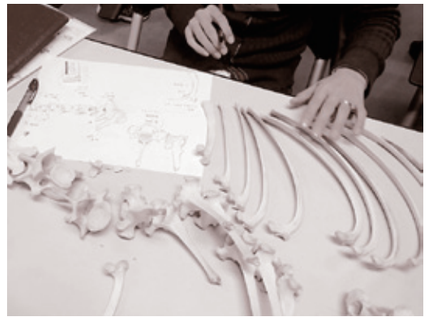
ご自身の出品作品について解説される八鍬利郎名誉教授



学生によるギャラリー・トーク

実物科学教育の札幌圏モデルの構築

～CISEネットワーク総括～



パラタクソノミスト養成講座　哺乳類（中級）



ヒグマ・サイエンステーリング「ヒグマの生態」

CISE（Community for Intermediation of Science Education）ネットワークは、平成24年度から平成26年度までの3年間、JST科学コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」の助成を受け、札幌周辺の社会教育関係施設にて、実物科学教育を展開しました。その結果、今まで連携が十分ではなかった博物館・科学館・図書館・動物園・水族館などの研究者や職員による連携講座や、標本・資料を活用した教材協働開発などを進めることができました。各事業には、多数の地域住民に参加していただき、科学の楽しさや面白さを知っていただくことができました。

JSTの支援は2015年3月31日に終了しましたが、今後もこの活動を継続することになっています。2015年3月5日の運営委員会にて、JST支援事業2年9ヶ月の活動の総括を行いましたので、下記の通り検討された項目ごとに報告いたします。

1. 実物教育関連講座・実習

これまで北大総合博物館でしか行ってこなかった取組みを、地域の博物館などでも行えるようになり、確実に裾野が広がりました。その結果、第一線の研究者から標本の取り扱い方・製作方法を学べる貴重な機会であり、大学が主体となっているからこそ実施できた活動となりました。

2. サイエンステーリング

諸施設の特色を活かし、一つのテーマについて多面的な事業を展開できた点は非常に良かったと思います。参加者は対象を多面的に観察・理解することができ、さらに館園側も、企画から実施までを通して、これまであまり縁のなかった異業種との関係を新たに構築することができました。トランクキットが整備され、テーリングの内容もかなり充実しました。また、WG会議などで交流し情報を共有していく中で人的ネットワークが強固なものになるなど、参加団体の連携が強化されました。

3. 科学の祭典等への出展およびCISEサイエンス・フェスティバルの実施

さまざまな人が見て、触れて、体験できる機会を提供することができました。普段は博物館・科学館や図書館等と縁はないが潜在的な興味を持つ人々を、一歩近寄せたイベントになりました。また、博物館の資料を多くの人にご覧いただける、とても良い機会になったと思います。

4. 地域ネットワークの構築状況について

運営委員会やWG会議などで交流し情報を共有していく中で、人的ネットワークが強固なものになり、参加団体の連携が強まるなどの効果がありました。また、これまであまり付き合いのなかった他市町村、異業種の館園との連携により、自然史への多面的なアプローチを試みることができました。また、職員同士のコネクションも形成され、将来に向けて大きな財産となりました。

ただ、北海道大学と参加機関・施設との結びつきは強固となりましたが、施設どうしの連携はまだ十分ではありません。また、人材や標本、情報の相互交流、活用についての達成度は、まだ不十分な状態ですので、今後の課題として捉えています。

5. 総合評価

大都市圏で科学教育に携わる異業種同士の連携を深め、サイエンステーリングやトランクレッスンなど、自然史に対する多くの事業が実践されました。多面的な視点を市民に提供できるなど、いろいろな施設が各々の実情にあわせてかかわることのできるネットワークができました。また、北大の持つ人材・標本・機材等の学習資源が有効に活用され、地域の施設単独では難しい事業が数多く実施されるなど、地域の教育の向上に大きく貢献できた活動となりました。

その一方、北大と諸施設との連携だけでなく、施設間での連携による事業をもっと実施できると良かったと思います。また、広報・情報発信等の課題、館園の規模や所在地の違いに起因する負担量の違いが感じられ、改善の余地があります。

菊田　融
（資料部研究員）



学習支援教材「サケトランクキット」

ボランティア活動紹介

総合博物館では、学生や市民から成るボランティアの方々がグループに分かれて、教員や研究員の指導のもと活動しています。200名近くの方々が、学術標本の保存や研究、教育普及、情報発信など、様々な分野で当館を支えてくださっています。当館では14グループ、水産科学館では1グループが活動しています。さらに、2015年度春にハンズオンボランティアと展示改訂(地学)ボランティアの2グループが発足しました。

ボランティア活動は外部からは見えない地道な作業が多く、ボランティアは縁の下の力持ちのような存在です。そうした普段は裏方として活躍している各グループのボランティアの方々に取材を行い、日々どのような作業をしているのかをお聞きしました。新たな2グループの活動についても、今後、本誌でご紹介します。

◉水産科学館

総合博物館分館である水産科学館では2010年度に学生ボランティア制度を開始し、現在は22名の学部生・大学院生が登録しています。今年度は生物標本庫の建て替えのため、主に液浸標本の整理をしています。



標本整理する学生たち



ラベルデータの確認作業

地名の違いに驚いたり、難しい文字に悩んだり、知っている採集者の名前に感激したりと、知的好奇心を刺激される作業です。1点1点終える毎に、喜びと達成感を味わっています。

◉植物

複数の班に分かれて膨大な標本の整理を中心に活動しています。未整理標本のラベルには学名・地名・日付等の情報が手書きで記されていて、時には判読に時間がかかることもあります。『北海道地名辞典』や『日本植物図鑑』など分厚い資料を参考にしながら判断し、得た情報はデータベース化することで管理しています。

また、耐震工事に向けた作業も進められています。新しい収蔵庫でAPG III 体系(DNA解析によって改訂された、新しい被子植物分類)に基づいて再配架する時のために、表記を統一したラベル貼りを急ピッチで進めています。

◉昆虫

膨大な昆虫資料を研究に使用できるような標本に作製して、グループ分けを行っています。採集した昆虫を標本として成り立たせるためには、形を整えてラベルをつけることが必要です。整形されぬまま乾燥してしまったものもあり、時には筋肉を断ち切って再度整えるといった繊細な技術が求められます。標本箱に並べる作業も標本を破損させないように慎重に進められますが、小さな昆虫の場合は特に目も疲れて骨が折れる作業になるとのことです。整理を終えた標本箱を度々確認しては、メンテナンスを行うことも重要な作業です。



細かい整理作業

◉考古



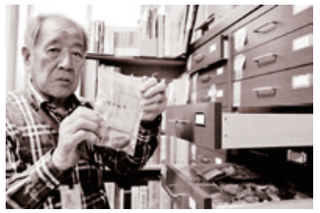
標本作成に挑む学生たち

考古グループは、発掘資料の再整理および収蔵資料データベースを作成する遺物整理班と、動物骨格標本作成班の2班に分かれて活動しています。

遺物整理班では、1970年代に発掘したオホーツク文化遺跡の出土情報が記載されたカードをもとに、出土遺物の台帳作りを行っています。現在はデータ入力が中心ですが、土器の接合や拓本作り、ジオラマ作り(!?)を今後してみたいとのことです。

骨格標本作成班では、骨格に関心のある学生が集まり、鳥や魚の解体を行っています。解体はただ切ればよいのではなく、必要な部分を取り出すためには綿密な計画と緻密な作業を要するそうです。ここで標本作成の技術を身につけ、今後の研究や趣味に活かしたいとのことです。

◉地学



数多くの標本が収められている標本棚

作業部屋にはラベルの貼られた棚がずらりと並べられており、大きく地域ごとに分けられた標本が収められています。なかには2010年にボランティア活動中に発見された、北海道で2番目に古い標本も含まれています。道庁地質技術者が1887 ～ 1893年頃に道内で採集した約1,000点で、長い間倉庫に保管されていたものです。こうした岩石・鉱物・化石標本はラベルを基にデータベース化していますが、作業量に対して人手が全く足りていないとのことです。収蔵庫には世界中から採集された未整理の標本が多数残されており、それらを誰が見ても分かるように整理していくことが今後の目標だそうです。他に、地球を体感できる教材の作成なども行われています。

◉メディア

博物館からの情報発信を担い、Facebookに記事を投稿しています。企画展や博物館の講義についての取材、展示を紹介する映像の制作等を自ら企画して活動しています。ボランティアの視点を取り入れた情報発信を行うグループです。

ホームページには掲載されないような「今」の情報をリアルタイムで発信することが、Facebookの強みであり、役割だと思います。とっておきの写真を使って印象に残るような記事になるよう心がけています。博物館は休館中ですが、今後も継続して博物館をPRしていきたいです。

◉化石

化石グループは、レプリカ班とクリーニング班に分かれて活動しています。

レプリカ班では、化石から型取りした石膏に彩色してレプリカを作っています。和気あいあいとした雰囲気ですが、手元は休まず、見る見るうちに実物に近づいていきます。これまでは歯や小ぶりのアンモナイトなど小さなモノを制作してきましたが、最終的には恐竜1体のように大きなモノをつくるのが目標とのことです。

クリーニング班では、発掘された化石に固着している岩石をエアーチゼルで削りとる作業を行っています。ここ数年は、むかわ町立穂別博物館と協力して作業していますが、まだ全体の1割ほどが終わったにすぎないそうです。



クリーニング作業

こうした過程を経たレプリカや実物化石は、研究や展示に活用されています。

◉北大の歴史

北大の歴史、特に札幌農学校の初期に関する資料を整理しています。例えば、學藝會(がくげいかい)が発行していた『蕙林(けいりん)』(全10編)を基に、ウィリアム・S・クラークに関する日本で初めての記事や同会会長の新渡戸稲造が記した記事を現代語訳にしています。また、開拓使仮学校や旧島松駅逓所などクラーク博士に関することを幅広く調べています。そうして得た情報は、展示解説や展示の修正に活かされています。

こうした作業をしていると、学生の達筆さや農学校での食事といった実生活を知ることができて、当時の先生や学生達の生き生きとした様子を窺い知ることができます。新しく発見することもあって面白いです。今後は、いかに多くの人々に伝えていけるかが重要だと思います。

◉展示解説



企画展のワークショップ

団体見学や企画展での展示解説、館内案内、イベントの対応など活動は多岐にわたり、来館者との直接的な交流があるグループの1つです。メンバーはそれぞれ得意分野、もしくは関心のある活動に参加しています。展示解説では事前にシナリオを考え資料を用意し、時にはクイズや豆知識、雑学を盛り込んで、見学者の反応を見ながら臨機応変に対応しています。また、普段から館内を巡回することで、気づいたことや来館者の声をいち早く届ける役割も担っています。来館者への声掛けはタイミングとその内容に気を遣いますが、展示の説明で「ありがとう」という言葉をいただいた時が嬉しく思えるとのことです。

◉翻訳

展示の英文を修正したり、ホームページの英文化作業を行ったり、英語翻訳全般への協力を行っています。当館には、国内だけではなく国外からも多くの方々が来館します。外国人観光客の数は増加傾向にあり、展示のキャプション・解説の翻訳の需要は年々高まっています。英語に限らず、他言語の対応も重要な課題です。

展示はもちろんですが、特にホームページは世界中に発信し多くの人々の目に触れるものですから、北海道大学の博物館として恥ずかしくないような表現を心がけています。リニューアルを機に国際化が進められると思うので、これからもできる限りのことをしていきたいです。

◉平成遠友夜学校

2005年に開校した平成遠友夜学校では、毎週火曜日に市民向けの無料講座が開かれています。その運営全般を担っているのは、ボランティアを含む市民や学生です。学生は本校の教頭の任についており、講師の依頼や打合せ、当日の司会進行などを担当しているほか、時には講師として講演することもあります。会場設営や片づけは市民ボランティアに加えて、受講生も一緒にお手伝いしてくださるそうです。



講師の話に熱心に耳を傾ける受講生

遠友学舎には年齢・職業・人生経験が多様な人々が集まり、知識や情報など知の交流が活発に生まれます。知的好奇心を刺激するような体験ができる場はとても貴重ですが、平成遠友夜学校の認知度がまだ低いのが課題です。今後は広報に力を入

れて、学生をはじめ、もっと多くの人に知っていただき、参加していただきたいです。お気軽に遠友学舎にお立ち寄りください。

◉4Dシアター

国立天文台が開発した宇宙ビューワー “Mitaka” を用いて、3次元空間に時間を加えた「宇宙の4Dシアター」を開催しています。正確な位置に配置された星々を地上からだけではなく、宇宙空間を自在に移動して観察することができるのが特徴です。上映会の解説者を「ナビゲーター」、Mitakaの操縦者を「パイロット」と独自の名で呼んでいて、両者の息の合ったシアターはさながら宇宙旅行のようです。ミーティングでのテーマ設定、チラシ・シナリオの制作、パイロットとナビゲーターの練習など、事前の準備が滞りなく進められて初めて完成します。



満席の会場

4Dシアターの魅力は、老若男女を対象としていて映像だけでも楽しめるところだと思います。リニューアル後は今よりも大きな会場になる予定なので、より多くの方々に楽しんでいただきたいです。

◉チェンバロ

「知の交流」コーナーに設置されているポプラチェンバロの維持、演奏を行っています。チェンバロは温湿度の変化に弱く、それによって音が変わってしまうほど繊細な楽器であるため、維持管理がとても重要です。そのため、加湿器の管理をしたり、調律などのメンテナンスをするなど、維持管理を活動の主目的としています。

維持管理は重要ですが、同時に楽器は演奏してこそ価値のあるものだと思っているので、定期的に小演奏会を開催し、加えて昨年は北大生や館長との共演コンサートを開催しました。博物館での演奏は聴く方との距離が近いのが特徴です。時にはチェンバロに触れていただきながらコミュニケーションを取って演奏しており、ゆったりとした雰囲気のなか演奏者も聴く方も気構えることがありません。博物館という場でこのような近くで聴けるなんて、とよく驚かれますし、喜んでいただけるのが嬉しいです。



癒しの時間

◉図書

館内の2階奥にある図書室では、文献整理と標本新聞のデータベース化が進められています。現在は、世界中から寄贈された昆虫に関する論文について、著者別・寄贈先別に仕分けてデータベース化しています。

また、植物標本の整理に伴って新聞が交換破棄されるのを機に、古新聞を新聞資料として収集保存しています。古新聞は研究者らが採集した植物標本を挟んで乾燥させるために使用していたもので、その種類は明治・大正・昭和期の合計120紙にのぼります。新聞紙名・日付順に仕分けてデータベース化を進め、最終的には資料の公開や教育普及に役立てるのが目標です。



古新聞の整理作業

新聞はその時々の国情や世論を克明に表しています。時代を読み解く資料となるわけですから、歴史好きにとってはまさにお宝です。日々の断片的な記事の前後関係を追う楽しさもあります。

◉第2農場

第2農場の再公開に向けて2013年度に発足したグループです。取材時には勉強会が開かれており、第2農場の建築構造や農業形態、さらに北海道や農業の歴史など幅広く学んでいました。今後も勉強会を重ねながら、耐震工事終了後は現地での解説を想定した準備を進めます。

農業に関する知識は少ないので、土地の単位や農具の名前といった基本的なことから順に勉強しています。第2農場には見ただけでは分からない昔の農業機械も多いので、しっかりと勉強して、見学にいらした方に伝えられるようにしたいです。

第2農場は今年6月14日に公開再開しました。



勉強会

本稿を執筆するにあたり、約1か月にわたって各グループの活動を取材しました。日々の活動を間近に見ることができ、当館の使命である①学術標本の保存・研究、②教育普及、③情報の発信に大きな役割を担っている存在だと改めて感じました。ボランティアの方々との協働を通して、4つ目の使命、博物館文化の創造を実現していければと思います。

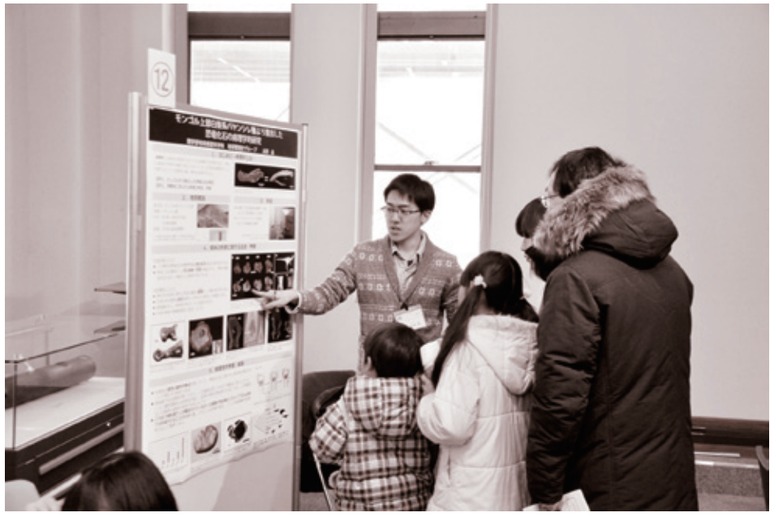
活動中の取材に快くご協力くださいましたボランティアの皆様に、紙面を借りてお礼申し上げます。

西本結美・高橋一葉
（研究支援推進員）

卒論ポスター発表会

●2015年2月28日・3月1日

2015年2月28日と3月1日に、本学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、博物館で来場者に分かりやすく説明して質疑応答する「第7回 卒論ポスター発表会」を開催しました。この取り組みは、北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目指しています。文学部、水産学部、理学部、農学部、工学部の4年生12名が次のタイトルで発表しました。



来場者に説明する4年生

＊今井あかね（工学部）
「北海道帝国大学理学部本館（1929年）の建設経緯とその特徴」

＊濱本亨（農学部）
「牛のおしっこと地球～塩分が高い家畜糞尿が土壌に及ぼす影響～」

＊山本敦博（理学部）
「CAIから紐解く隕石の形成環境の解析－同位体分析の一例－」

＊小川史洋（工学部）
「小中学校を対象としたプロポーザル方式による設計者選定後の設計過程－札幌市建築部主催プロポーザル方式の成果と課題－」

＊中村俊介（農学部）
「NIP5;1ホウ酸吸収型チャネルタンパク質の細胞内輸送メカニズムの解明－細胞膜で働くNIP5;1はどのようにして細胞膜に行くのか？－」

＊白井孝信（水産学部）
「キンギョにおける白血球培養の条件検討－培養した白血球から染色体を見る－」

＊佐藤凌（工学部）
「北海道の建築板金技術の発展と住宅作品の外観にみる使われ方」

＊辻本克斗（農学部）
「地上タワー観測によるクロロフィル蛍光を用いた常緑針葉樹林における生態系CO 2吸収量の解明」

＊藤岡奈緒美（文学部）
「池大雅筆≪浅間山真景図≫に関する考察－大雅の真景図制作のねらい－」

＊髙橋宏矢（工学部）
「公共建築を対象としたプロポーザル方式による設計者選定後の設計過程―札幌市建築部主催プロポーザル方式の成果と課題―」

＊杉崎麻友（農学部）
「CGS 1遺伝子の翻訳アレストに関する研究」

＊太田晶（理学部）
「モンゴル上部白亜系バヤンシレ層より産出した恐竜化石の病理学的研究」

発表者は、1枚のポスターを完成させるまで博物館担当教員らの指導を受け、発表者同士で意見交換し、改訂を繰り返し、そして多様な来場者を想定したリハーサルを重ねて準備しました。発表会の2日間、さまざまな年代の異なる関心をもった来場者への対応に苦労しながらも研究内容について解説し、来場者との対話を展開しました。市民と北大教職員から成る審査員9名の投票による3種類の賞と来場者の投票による来館者賞が津曲敏郎館長から授与され、審査員の講評や来場者の感想を伺う講評会が行われました。最優秀賞と優秀コミュニケーション賞は農学部の中村俊介さん、優秀デザイン賞は理学部の太田晶さん、来館者賞は水産学部の白井孝信さんと文学部の藤岡奈緒美さんが受賞しました。

発表会の運営もミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目と位置づけ、水産学部2年生1名と文学部2年生2名、理学部3年生1名が、ポスターとプログラム冊子の制作、会場設営、当日の受付、表彰式・講評会の司会進行などを担当しました。会場には北大カフェプロジェクトによるカフェが開設され、和やかな対話を楽しむ場が生まれました。

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者から新鮮で有意義なご意見をいただいたり、グループで企画をトータルに運営していく難しさを実感したなど、大学博物館という場で貴重な経験を積んだことが綴られています。



表彰式



運営を担った学生たち

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

厳冬期の授業

●2015年2月10日・12日・13日

総合博物館では、毎年2月に大学院生を対象とした授業「博物館コミュニケーション特論Ⅳ映像表現 冬の陣、映像制作とスノーボード（担当：藤田良治、湯浅万紀子）を開講しています。この授業では、冬の北海道の厳しい環境で映像や写真を撮る技術を学びます。気温はマイナス10度にもなり、雪が積もった環境は、撮影機材にとっても過酷です。厳冬期の撮影実習は、機材だけでなく受講生にとっても辛い環境です。授業では、撮影に加え、スノーボードの技術も同時に習得することを目指します。スノーボードの技術は初心者レベルを対象としており、総合博物館の共同研究室にてスノーボードやブーツ、ウェアなどの身に付け方や値段の違いによる性能の違いなど基礎から学びます。

このユニークな実習は、札幌駅から徒歩5分に位置する北海道大学札幌キャンパスの一等地、中央ローンで行います。夏は、サクシュコトニ川の周りに青々とした芝から生命力を感じますが、冬の中央ローンは、一面真っ白な雪に覆われ自然の厳しさを目の当たりにします。太陽に輝く雪面は美しく輝き、まぶしさを感じます。この様子を撮影機材で撮影すると、カメラは強い逆光と捉え絞るため、全体に暗く映ります。自分のイメージに近づけて撮影するには、絞りを開けて被写体が明るく映るように設定して撮影します。受講生は、刻々と変わる環境の中で、その都度、撮影技術を学びその時々に適した撮影方法を選択できるようになります。マイナス気温になるとバッテリーが通常の半分程度しか持たないことを体感することもあります。実習中に撮影した映像は、附属図書館にある編集機材を使用して一つの作品に仕上げます。授業の最後では、完成した映像を上映し、お互いに評価します。厳しい指摘もありますが、自分たちの成長が映像となって記録され、先ほどまでの過酷な環境での授業を懐かしく感じているようです。



授業の最終日は、映像編集を学ぶ

今年度の受講生達も、この集中講義で映像制作とスノーボード技術を実践的に学ぶことで過酷なフィールドでの撮影技術や対処法、映像の持つ魅力を集中的に学びました。

藤田良治
（高等教育推進機構准教授 / 博物館映像学）



スノーボードを手にした受講生達

2014年度

第2回ボランティア講座＆交流会

●2015年2月14日

2014年度の2回目のボランティア講座＆交流会は、津曲敏郎館長を講師にお迎えし、「北方民族の世界　常設展開設に向けて」と題したご講演をいただきました。この講座は、4年間務めていただいた総合博物館館長を退任される記念の館長講演会としても位置付け、多くの市民の方にもご参加いただきました。先生のフィールドでのご研究について、話者の方とのやりとり、民話やアートにも言及され、詳しく分かりやすく解説していただきました。また、今後、新規常設展に盛り込んでいかれたい内容や展示手法もご紹介いただきました。詳細は本誌2-3頁をご覧下さい。講演後には参加者の方々から次々と質問をお寄せいただき、先生には一つ一つ丁寧にお答えいただきました。



津曲敏郎館長を囲んで

その後の交流会は津曲先生の奥様にもご参加いただき、手作りのお菓子に参加者が感激する一幕もありました。津曲先生からボランティアの方々の日頃の活動へのお礼が述べられ、ボランティアの方々からは、チェンバログループとギターで共演するなど親しく交流してくださった津曲先生への感謝が述べられました。バレンタインの午後、楽しい歓談のひとときを過ごすことができました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

サイエンスパーク in 北海道大学

●2014年12月6日

2014年12月6日に、鈴木章名誉教授をお迎えして、子ども達に科学への関心を深めてもらう実験交流イベント「サイエンパーク in 北海道大学」（主催：北海道、北海道大学総合博物館）を開催しました。参加したのは、札幌市と旭川市の小学校5、6年生と保護者30組です。会場は、鈴木先生のノーベル化学賞受賞を記念して建設されたフロンティア応用科学研究棟です。



実験にアドバイスする鈴木章名誉教授とミュージアムマイスター

主催者を代表して川端和重北海道大学副学長からご挨拶をいただいた後、鈴木先生から科学への関心を広げるこの機会を楽しんでほしいとお言葉をいただきました。そして、山本靖典工学研究院准教授の指導のもと、参加児童は、隣に座った保護者が見守るなか、各自で鈴木-宮浦クロスカップリングの実験を行いました。鈴木先生や川端先生、山本先生、津曲敏郎総合博物館館長が児童の席をまわり、ハプニングへの対応方法などについてアドバイスなさいました。司会進行を務めたミュージアムマイスターの久保田彩さん（理学院修士1年）と山内彩加林さん（水産学部2年）も児童に声をかけて、実験を手伝いました。



鈴木章名誉教授を囲んで

続いて、鈴木先生への質問タイムが実施され、児童は「ノーベル賞を受賞したときの気持ち」や、「研究で失敗したときの挫折からの克服方法」などについて積極的に質問しました。



総合博物館で関連展示を案内するミュージアムマイスター

鈴木先生は、「ノーベル賞をいただいたことは嬉しいが、研究で自分が疑問に思ったことがわかったことの方が嬉しかった」、「研究を続ける上で、失敗や挫折を恐れてはいけない」など、優しく応えていました。その後、参加者一人一人に鈴木先生から修了証が授与され、津曲館長から失敗を恐れずにチャレンジしてほしいとのお言葉をいただき、全員で記念撮影を行いました。

イベント終了後、ミュージアムマイスター 2名が、参加者を会場2階と総合博物館に案内し、ノーベル賞関連展示について解説しました。参加児童にとって鈴木先生と共に過ごした時間はよい思い出になったことと思います。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

「エルムの杜の宝もの」── 道新ぶんぶんクラブとの共催講座を開催



小林快次准教授の講座（写真提供：道新ぶんぶんクラブ）

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、当館を初めて訪れる方も多く、講座を通して当館を知っていただくよい機会になっています。2014年度も次のように幅広い内容で実施し、ご好評をいただきました。総合博物館ボランティアの方々にも毎回、運営にご協力いただきました。

第1回「穂別で発見されたハドロサウルス科恐竜」（小林快次准教授／古脊椎動物学）、第2回「ナスカの地上絵の謎に鳥類形態学から挑む」（江田真毅講師／動物考古学）、第3回「博物館が映像を創ると、おもしろい」（藤田良治助教／博物館映像学）、第4回「謎の海底火山――地球第4のマグマ噴出場」（山本順司准教授／地球科学）、第5回「北大構内の歴史的建築を巡るツアー」（池上重康資料部研究員／近代建築史学）

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

ポプラチェンバロコンサート

●2014年11月23日

2014年11月23日、「知の交流」コーナーにてチェンバロボランティア企画による、ポプラチェンバロ「Potpourri Concert」が開催されました。

チェンバロボランティアの新妻美紀さんの演奏に、北大交響楽団の学生のフルート、オーボエ、バイオリン、チェロ、さらに津曲敏郎館長のギターが加わり、美しい豊かな音色で、G.サンマルティーニや、バッハの作品などをお楽しみいただきました。

津曲館長によるギター講座では、チェンバロとギターの相違点を分かりやすく説明していただきました。コンサート終了後も多くの来場者がチェンバロを間近に取り囲み、熱心に説明を聞いていました。チェンバロは大変繊細な楽器のため、調律やメンテナンスが欠かせません。今回のコンサートの調律は、チェンバロボランティアの小野敏史さんに担当していただきました。

（事務室）



ギターを演奏する津曲敏郎館長



演奏と調律を担ったメンバー

北大ミュージアムクラブ Mouseionによる展示解説

●2015年2月7日・8日・28日、3月1日

2015年2月7日と8日、そして卒論ポスター発表会が開催された2月28日と3月1日の4日間、北大ミュージアムクラブMouseionが展示解説を行いました。Mouseionは、北海道大学が学生生活をより充実させる学生自主企画を支援する「北大元気プロジェクト」に4年連続で採択されており、その企画の一環として解説に臨みました。今回は、以前に別の解説を行ったことのある解説員も新たに解説を一から作成するなど、新たな試みも行いました。また、従来通り、当該分野の先生方に解説原稿を点検していただき、解説デビューする新解説員も含めた解説員同士での原稿のチェックや、解説員の癖などを確認してコミュニケーション方法を改善するためのビデオチェックも行いました。解説テーマと担当学生は次の通りです。解説者以外のメンバーが解説をサポートしました。

「氷の海の民のお話」（岸百合子・文学部3年）
「タヌキの生態」（伴遼太郎・農学部2年）
「人と生物・在来種と外来種」（岩崎峻・水産学部2年）
「牛」（井宮汀士郎・教育学部1年）

新解説である3階学術資料展示室での「人と生物・在来種と外来種」では、天候の悪い中、多くの来館者の方々に集まっていただき、展示室が満杯になるほどでした。また同じく新解説である「タヌキの生態」では、小学生から積極的に質問をしていただきました。解説を聴いてくださった来館者の皆様、いつも支えてくださる博物館の先生方、そしてサポートしてくださった皆様、ありがとうございました。

井宮汀士郎
（教育学部2年）



3月1日の解説を終えて、卒論ポスター発表会で受賞したMouseionの太田晶先輩を囲んで

宇宙の4Dシアター 公演報告

●2015年3月15日

宇宙の4Dシアターボランティアでは、2015年3月15日に長期休館前の最終公演を実施しました。題目は「知ってたつもりの暦（こよみ）のお話し」。春分の日にちなみ、暦とは何か、暦はどうやって作られたのか、世界にある様々な暦の紹介などを、クイズをまじえつつ、宇宙を旅しながらわかりやすくお伝えすることをめざしました。

今回は長期休館前の最終公演ということもあり、午前に1回、午後に2回と、1日に3回の公演プログラムを組みました。この時期の博物館でこの公演回数は無謀ではないかと懸念していましたが、いずれの回も超満員で大変にぎやかなイベントになりました。

当日、公演開始直前にPCの映像がモニター投影できないという深刻なトラブルが発生しましたが、これまでにも実に様々なトラブルに対処してきていますので、今回もプロジェクター投影に急きょ切り替えることで乗り切ることができました。アンケート結果によりますと、このトラブル対処に関するご不満は一切なく、ご来場者には大変ご満足いただけたようで安堵しました。

宇宙の4Dシアターは、当館の長期休館とともに本年4月から公演活動をいったん中止することになりました。これまでに参加していただいた大変多くの皆様に御礼申し上げるとともに、活動休止中のご不便にお詫び申し上げたいと思います。休館中は、リニューアルオープンに向けた準備に勤しむ予定です。リニューアルオープン後も当シアターに足をお運びいただけますよう心よりお願い申し上げます。

山本順司
（研究部准教授／地球科学）



公演中のシアター室風景。PC画像がサブモニターに投影できないトラブルが発生したため、プロジェクター投影に切り替えて乗り切った。

耐震改修工事による休館のお知らせ（休館期間：平成27年4月1日～平成28年7月頃）

総合博物館では、平成26年10月より展示室を一部閉鎖して、耐震改修工事を実施してきました。平成27年4月1日からは、正面玄関や外壁の工事及び足場の設置等のため、来館者の安全を十分に確保することが難しくなることから、すべての展示室を閉鎖し、公開を休止しております。工事終了後は、平成28年7月頃より展示リニューアルを経て再開館する予定です。展示室リニューアル・オープンの詳細は、決定次第お知らせいたします。また、公開休止中に予定されている各種事業等につきましては、総合博物館ホームページ等でお知らせいたします。皆さまには多大なご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

◎お問い合わせ先

北海道大学総合博物館
（理学・生命科学事務部事務課 博物館担当）
TEL：011-706-2658
E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

平成26年度後期 記録

平成26年10月から平成27年3月までに行われたセミナー・シンポジウム

バイオミメティクス市民セミナー
「微細構造による機能 ―摩擦を中心に―」
平井 悠司（千歳科学技術大学 バイオ・マテリアル学科 専任講師）
日時：10月5日（日）13：30～15：30
参加者：30名

バイオミメティクス市民セミナー
「モノづくりとバイオミメティクス」
山崎 英数（富士フイルム株式会社 R＆D統括本部 生産技術センター 統括マネジャー）
日時：11月1日（土）13：30～15：30
参加者：40名

バイオミメティクス市民セミナー
「水生生物の泳ぎを規範とした水中推進ロボット」
小林 俊一（信州大学 学術研究院 教授）
日時：12月6日（土）13：30～15：30
参加者：50名

バイオミメティクス市民セミナー
「生体構造を模倣した身体に優しい医療デバイス」
石原 一彦（東京大学 大学院工学系研究科 教授）
日時：1月10日（土）13：30～15：30
参加者：30名

バイオミメティクス市民セミナー
「ミメティクスおもしろネタの源としての昆虫分類学、形態学」
吉澤 和徳（北海道大学 農学部 准教授）
日時：2月7日（土）13：30～15：30
参加者：40名

公開ボランティア講座・館長講演会
「北方民族の世界：常設展開設に向けて」
津曲 敏郎（北海道大学 総合博物館 館長／北海道大学 大学院文学研究科 教授）
日時：2月14日（土）13：30～15：00
参加者：70名

バイオミメティクス市民セミナー
「海洋生物とバイオミメティクス」
椿 玲未（独立行政法人 海洋研究開発機構 ポストドクトラル研究員）
日時：3月7日（土）13：30～15：30
参加者：40名

平成26年10月から平成27年3月までに行われたパラタクソノミスト養成講座

野外採集・地質見学会
松枝 大治（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
石井 彰洋（士別市立博物館）
岡本 研（士別市立博物館）
日時：10月11日（土）～12日（日）定員：20名
対象：中学生以上（参加者26名）

鉱物パラタクソノミスト養成講座（初級）in 北方自然教育園
松枝 大治（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：10月25日（土）定員：10名
対象：中学生以上・一般（参加者7名）

化石パラタクソノミスト養成講座（初級）in 北方自然教育園
越前谷 宏紀
（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：10月26日（日）定員：10名
対象：中学生以上・一般（参加者7名）

隈石パラタクソノミスト養成講座（初級）in 山の手博物館
松枝 大治（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
鳥本 淳司（北海道大学総合博物館 研究生）
日時：11月1日（土）定員：10名
対象：中学生以上・一般（参加者9名）

昆虫セミ・カメムシパラタクソノミスト養成講座（初級）in 小樽
山本 亜生（小樽市総合博物館 学芸員）
神戸 崇（北海道大学大学院農学研究院 学術研究員）
稲荷 尚記（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：11月15日（土）定員：12名
対象：中学生以上・一般（参加者7名）

植物用語パラタクソノミスト養成講座（初級）in 博物館活動センター
山崎 真実（札幌市博物館活動センター・学芸員）
日時：11月22日（土）定員：10名
対象：高校生以上・一般（参加者10名）

化石パラタクソノミスト養成講座（初級）in 博物館活動センター
小林 快次（北海道大学総合博物館 准教授）
日時：1月17日（土）定員：10名
対象：中学生以上・一般（参加者10名）

魚類パラタクソノミスト養成講座（初級）
河合 俊郎（北海道大学総合博物館 助教）
永野 優希（北海道大学水産科学院）
日時：3月19日（木）～20日（金）定員：6名
対象：中学生以上・一般（参加者5名）

平成26年10月から平成27年3月までの主な出来事

10月4日 企画展示「美術の北大」展 開催（～ 11/30）
10月12日 宇宙の4Dシアター 開催
10月16日 国立科学博物館理事一行（3名）解説
10月17日 国立大学理学系学長会議（16名）解説
10月31日 国立大学協会総務部長一行（3名）解説
11月2日 宇宙の4Dシアター 開催
11月17日 文部科学省大臣官房人事課長一行（3名）解説
11月23日 ミュージアムコンサート「ポプラチェンバロ Potpourri Concert」開催
11月27日 ソウル大学事務局長一行（6名）解説
12月3日 パブリックビューイング「"HAYABUSA2（はやぶさ2）" 打ち上げパブリックビューイング」
12月5日 文部科学省大臣官房政策課評価室長 解説
12月6日 サイエンスパーク in 北海道大学
12月14日 巡回展示「北海道大学がやってきた、学船 洋上のキャンパスおしょろ丸」開催（小笠原諸島父島二見港）
宇宙の4Dシアター 開催
1月10日 宇宙の4Dシアター 開催
1月11日 CISEサイエンスフェスティバル2015 in チ・カ・ホ（～ 1/12）
1月31日 藤田良治 助教 学内異動
2月10日 イェーテボリ大学（スウェーデン）経済学研究科長一行（6名）解説
2月13日 東南大学（中国）副学長一行（6名）解説
2月20日 文部科学省国立大学法人支援課係長他一行（7名）解説
3月2日 国立民族学博物館副館長一行（2名）解説
国立ニーデ大学長（トルコ）一行（5名）解説
3月3日 バルセロナ大学事業開発部長等、澎湖科技大学（台湾）教授等ほか一行（12名）解説
3月4日 メルボルン大学教授等シンポジウム参加者一行（17名）解説
3月13日 ルーヴェン・カトリック大学（ベルギー）哲学科教授一行（2名）解説
3月15日 宇宙の4Dシアター 開催
3月18日 ミュンヘン工科大学教授一行（3名）解説
3月24日 アイルランド・ダブリン工科大学長一行（5名）解説
3月26日 耐震改修工事のため、ミュージアムショップ閉店
3月31日 津曲敏郎 館長 退任
技術補佐員 林 昌広さん
技能補助員 荒木 久美子さん
学術研究員 菊田 融さん
事務補助員 藤澤 沙弥佳さん
退職

入館者数（平成26年10月～平成27年3月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示（略称）
10月	15,412	26	9	学船、美術の北大（10/4 ～）
11月	7,966	9	2	学船（～ 11/3）、美術の北大（～ 11/30）
12月	3,129	4	1	
1月	2,285	6	0	
2月	4,240	7	3	
3月	5,248	12	9	

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます（平成26年10月1日～平成27年3月31日）

（敬称略）

◉植物標本
阿部桂子, 蝦名順子, 大澤達郎, 大髙洋平, 大原和広, 小笠原 誠, 加藤康子, 桂田泰惠, 加藤典明, 金上由紀, 黒田シヅ, 佐藤広行, 鈴木順子, 須田 節, 髙橋美智子, 徳原和子, 栃原行人, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 松井 洋, 村上麻季, 吉中弘介, 与那覇モト子, 和久井彬実

◉菌類標本
石田多香子, 菅 妙子, 齋藤美智子, 外山知子, 丸山満枝

◉昆虫標本
青山慎一, 阿久津公祐, 植田俊一, 梅田邦子, 榎本 尊, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 斉藤光信, 佐藤國男, 志津木眞理子, 高橋誠一, 問田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 古田未央, 松本侑三, 宮本昌子, 村田真樹子, 村山茂樹, 山本ひとみ, 芳田琢磨

◉考古学
浅尾佳里, 安 翔宇, 安瀬琴絵, 五十嵐大将, 石田有莉子, 石場ゆり, 稲田 薫, 岩波 連, 大泰司紀之, 大柳好未, 奥山駿基, 角谷友美, 鹿島きく美, 神田いずみ, 木村則子, 久保田 彩, 黒田充樹, 斉藤理恵子, 佐々木征一, 佐藤美恵, 生内雅, 末永義圓, 瀬尾涼太, 高崎竜司, 立岡 樹, 田中公教, 中井勇海, 中嶋灯奈, 長瀬のぞみ, 中野系, 成田千恵子, 西本結美, 二瓶寿信, 平野このみ, 細木拓也, 堀 睦, 三芦真衣, 村岸恵美

◉地学
在田一則, 生越昭裕, 加藤典明, 加藤義典, 加藤利佳, 堺 俊樹, 酒井 実, 嶋野月江, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 山崎敏晴, 山本ひとみ

◉メディア
飯島正也, 河本恵子, 佐藤美恵, 手塚麻子, 中村翠珠, 三嶋 渉

◉化石
朝見寿恵, 安 翔宇, 安藤匠平, 飯島正也, 池上森, 池上秀紀, 石崎幹男, 池田雅志, 石橋七朗, 今井久益, 岡野忠雄, 尾上洋子, 加藤利佳, 金内寿美, 菊地知春, 木村聖子, 木村映陽, 久保孝太, 久保田 彩, 栗野里香, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井 実, 榊山 匠, 佐藤美恵, 園部英俊, 高崎竜司, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手塚麻子, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 豊島弥桜, 内藤美穂子, 中井勇海, 中島重大, 長瀬のぞみ, 中野 系, 八丁目清之, 八丁目文枝, 林 純二, 古井 空, 堀 睦, 前田大智, 森 淑子, 山下暁子, 吉田純輝, 吉水久乃

◉北大の歴史展示
石川満寿夫, 石黒弘子, 寺西辰郎

◉展示解説
在田一則, 飯島正也, 石橋七朗, 小野一成, 菅 妙子, 児玉 諭, 榊山 匠, 佐藤綾乃, 園部英俊, 高崎竜司, 武石 充, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 西澤亜紀, 沼崎麻子, 濱市宗一, 村上龍子, 森 淑子, ロバート・クルツ

◉翻訳
ロバート・クルツ

◉平成遠友夜学校
石川満寿夫, 石黒弘子, 柿本恵美, 木村則子, 齋藤美智子, 城下洽子, 髙山緋沙子, 竹内元信, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 村井容子, 山岸博子

◉4Dシアター
小松麻美, 今野成捷, 髙山緋沙子, 田中公教, 塚田則生, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子, 山本大貴

◉ポプラチェンバロ
浅川広子, 石川恵子, 宇治美穂子, 遠藤麻衣子, 長田大夢, 小野敏史, 清水聡子, 新林俊哉, 高橋友子, 谷川千佳子, 長竹 新, 中村会子, 新妻美紀, 野中敏明, 野村さおり, 福士江里, 藤田まりこ, 堀内麻衣, 松田祥子, 雪田理菜子

◉図書
伊藤ますみ, 岡西滋子, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子, 須藤和子, 髙木和恵, 谷岡みどり, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮒田久意, 星野フサ, 本名百合子, 村上龍子, 安田 正, 山岸博子

◉第2農場
石田多香子, 石川満寿夫, 大林正枝, 城下洽子, 竹内元信, 寺西辰郎, 成田千恵子, 濱市宗一

◉水産科学館
井口詩織, 石見裕太, 伊藤 慧, 岩井卓也, 奥香菜美, 小野寺拓真, 金子尚史, 河合 駿, 川畑 達, 亢 世華, 菊地 優, 木村克也, 工藤怜子, 櫻井慎大, 佐近 慈, 佐々木嘉子, 島田英憲, 杉原菜月, 高岸愛実, 栩野秀平, 中嶋 実, 中原隆史, 成田留衣, 松川広樹, 三上大樹, 山口拓朗, 山田翔平, 山本佑樹, 和田 茜

[表紙写真]
休館中の総合博物館。耐震改修工事のための防護シートに覆われている。（写真提供：藤田良治／高等教育推進機構准教授）

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館ニュース 第31号
編　集：湯浅万紀子・福田美波
発行日：2015年（平成27年）6月20日
発行者：中川光弘

発行所：北海道大学総合博物館
所在地：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷
畠山尚デザイン制作室